

『一遍上人行状図』の翻刻

吉 田 道 興

解 題

本書『一遍上人行状図』（別名「高祖一遍聖人行状図」、以下『行状図』と略称）は、聖戒編『一遍聖絵』（別名「二遍上人絵伝」、以下『聖絵』と略称）十二巻を元にして絵図と詞書をアレンジし、江戸末期（年月不詳）、木版画二枚に仕立てたものである。『聖絵』は、正安元年（一二九九）八月に成立、歓喜光寺（六条道場）旧蔵本であり、昭和五年に国宝指定を受け、現在、清浄光寺（時宗総本山遊行寺）に所蔵されている。

本書（木版画・収納箱）に印刷・発行の年記はない。恐らく聖人の五百五十回遠忌の天保九年（一八三八）の記念

『一遍上人行状図』の翻刻（吉田）

出版か、または安政五年（一八五八）六月に七条道場金光寺が類焼し、宗俊編『一遍上人縁起絵』（別名「遊行上人絵詞伝・一遍上人絵詞伝」、以下『絵詞伝』と略称）の模写本の一「七条道場本」が焼亡（『七条道場記』）した数年後に成立したと推定される。当該書は、それまで「遊行上人」の廻国遊行に携行し「絵解き」に用いられていた模様である（吉井清「時宗過去帳」『日本歴史』60、昭和28年5月）。

本書の内容に関しては、東海印度学仏教学会第五十五回学術大会（平成二十一年七月十八日）にて発表し『東海佛教』第五十四輯に所収される予定（投稿済）であり、詳しくはそれに譲る。本稿はその『一遍上人行状図』の翻刻をして広く一般に紹介することが目的である。

『一遍上人行状圖』の翻刻（吉田）

本書の存在は、時宗の僧侶でも一部の専門家を除き、あまり知られていない。曹洞宗に属し門外漢である小生が、この一兩年、一遍上人の伝記類の研究書を調査した限り、本書に言及した専門書（啓蒙書を含む）は寡聞にして知らない。それは、上記の『聖絵』や『絵詞伝』（原本逸亡、模写本の清浄光寺旧蔵本は明治四十四年焼失、神戸真光寺蔵本は現存）十巻を重要視していることに関係しているのであらう。

本書は、『聖絵』が貴重品で一般庶民には閲覧も困難であつた事情もあつて、安政五年に焼失した『絵詞伝（七条道場本）』に替わり、時宗教団として一般庶民に「絵解き」を通し一遍上人を知らしめ教化するために制作したものと推測される。また版木が浅草日輪寺（学寮）に所蔵されていた点から、時宗寺院および一般信者用に頒布するばかりではなく、教団の学生・雛僧の教材としても使用されていたものであらう。

頒布用の袋綴（龍紋付き）の上書きには、隸書体で「一遍上人行状圖」とある。二枚の巻上冒頭部には右から左へ横書きの隸書体で「高祖一遍聖人行状圖」、巻下冒頭部に

は同じく横書きで「藤澤山清浄光寺藏版」とあり、清浄光寺の発行となつている。上記のごとく浅草日輪寺に所蔵する版木は近年、東京都台東区教育委員会によつて調査され、報告書が出ている。なお、その中には詞書（漢文）を翻刻しているが数か所にわたり誤字や送り仮名・レ点にミスもある。それは原板が相当磨滅した状態も多分に関係していると思われるが、その労を多としたい。本稿では、それらを補正した。

画面構成は、第一面が七段組み二十二話、第二面が七段組み二十六話、合計四十八話である。

第一面（一段一話、二段三話、三段三話、四段二話、

五段五話、六段四話、七段四話）

第二面（一段四話、二段三話、三段四話、四段四話、

五段五話、六段四話、七段二話）

本書の詞書は、『聖絵』の長く雅趣豊かな和文から主要内容を抜き出し、その主旨を短く簡潔な漢文としている。最初の一段目「一行十五字の八行」は例外であり、他の段は「一行十四字で短いのは三行弱（二十九字）から長いのは十一行」にわたる。しかし漢字は、最大数で一五八

字であり、この点からも『聖絵』の詞書に比較し非常に短いことが判る。

さらに和歌も漢字（万葉仮名、右には片仮名のルビ）で記している。それは限られたスペース上、組版に生ずる制作品情としてやむを得ない措置といえる。また本書の詞書の文中には、『聖絵』にはない事項・字句がいくつ含まれている。たとえば『聖絵』詞書（1段）には、上人の誕生の月日と幼名を欠くが、本書では延応元年「二月十五日生」「乳名松壽」とする。これは『絵詞伝直談鈔』において『一遍義集』や『一遍上人年譜略』を典拠に記述し、それを参考に本書が引用したと思われる。同じく、この『河野略譜』は、『聖絵』詞書では文章形態であるが、本書では簡潔な「系図」である。

次に本書36段に編集ミスが誤植・誤字がみられる。文中の「僧一如」は『聖絵』および『絵詞伝』では「如一人」であり、明らかに本書のミスといえる。この「如一」は、『聖絵』に「もと佛法上人（＝道元）の門下にして禅門の工夫、年序つもり給（ひ）けるが、後に西山の上人にあひ奉りて一向専修の門に入り給へり」とある。聖人の師聖

『一遍上人行状図』の翻刻（吉田）

達と西山門下の同門であり、彼と道交があつて、その理想的な往生に憧憬の念を抱いていたことが判る。

また各段の諸種の逸話に関し、『聖絵』のそれと順序が前後するなどの相違がみられる。

1、本書25段↑『聖絵』26段―萱津滞在中、巨蜂の一团が法場に集まる

2、本書48段↑『聖絵』47段―凡遊行十六年間、受記者、二十五億千七百余人

3、本書28段中の二話、『聖絵』のそれと前後する。

①市屋にて法印胤恵が靈夢記を持参し聖人が勢至菩薩の化身であると告げ、藤原基長が瑞夢の賛徳文を持参したこと。

②聖人が空也に習い身に絹巾を纏わず、手は金具に触れず、生涯葷酒を絶ち十重の戒珠を全うすることを誓ったこと。

4、本書39段中の二話、『聖絵』のそれと前後する。

①花本寺の教願が備中軽部にて四十八日の結縁を果たした後、罹病し遂に臨終正念し往生したこと。

②「十二道具」の持文を讃述したこと。

『一遍上人行状図』の翻刻（吉田）

以下に書誌項目を列挙する。

題名 一遍上人行状図（袋綴）

別名 高祖一遍聖人行状図（掛幅巻上）、宗祖聖人御

絵伝（日輪寺蔵収納箱）

撰者 不明

画工 不明

法量（寸法）

第一面 縦137・2 cm 横67・2 cm

（画面 縦133・0 cm 横61・6 cm）

第二面 縦140・0 cm 横68・2 cm

（画面 縦132・6 cm 横61・5 cm）

版木箱の法量 縦20・0 cm 横150・5 cm 高73・8 cm

木箱の墨書（縦三行）

宗祖聖人／御繪傳版木函／藤澤山

平成十九年初夏、筆者が京都で入手し掛幅仕立てにした「紙面」の寸法

第一面 縦137・9 cm 横63・9 cm

第二面 縦138・0 cm 横64・1 cm

成立 不明。推定、天保九年～安政七年（一八三八～

一八六〇）頃

刊行 藤澤山清浄光寺（通称「遊行寺」）蔵版（掛幅

巻下）

所蔵（版木） 東京都浅草区西浅草神田山日輪寺（江

戸期「神田山芝崎道場日輪寺」）

本品は東京都台東区有形文化財指定「一遍聖人行状図版木二面 附、版木箱一合」

掛幅 遊行寺宝物館（彩絵一軸・線描二軸）、吉

田私蔵（他にも未発見のものがあろう）

凡例

一、本書の翻刻にあたり、便宜的に構成として上中下の順に「冠註」、「本文」、「書き下し文」の三段に分けた。

一、「本文」の各話は、『聖絵』にならない、冒頭に「第〇〇段」として並べた。

一、「本文」は、漢文体である。和歌も「万葉仮名」の漢字である。原本の漢字には、異体字・別体字・俗字等が含まれているが、異体字を除き他はできるだけ原文通りにした。

但し、「祖」は新旧混在しているが、便宜上、すべて新漢字に統一した。その漢文体には、読点がなくすべて句点であり、また返点と送り仮名（片仮名）が付されている。和歌の「万葉仮名」には、片仮名のルビが付いている。漢字とルビにはところどころ誤字とミスがある。

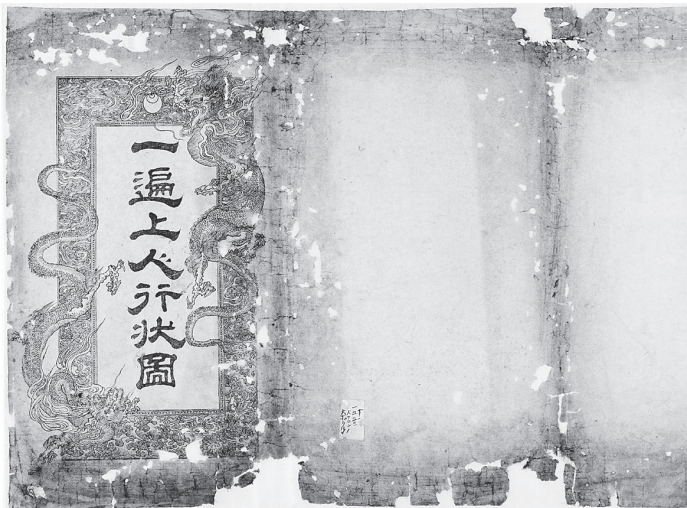
一、「冠註」には、異体字等の指摘と同時に『聖絵』『絵詞伝』などの語句や内容の相違点を若干記した。漢字の誤字やルビのミスは、気がつく限り触れた。さらに『聖絵』にある年月日をできるだけ付した。また難解と思われる語句の意味を多少添えた。

一、「書き下し文」は、活字用漢字（常用漢字・新漢字）にして、句点とともに読点も付し、読みやすくした。しかし、「佛」の字はそのまま残した。また「和歌」は、漢字が想定できても、すべて平仮名に改めた。さらに送り仮名の清音は、適宜、現代に通ずる濁音に直した。

また難解な漢字にはルビ（平仮名）を付した。

一、本書の原版（木版画）二枚を本文末に添えている。また参考までに、『聖絵』（遊行寺発行絵ハガキ）の部分と対比して、その中の六場面を抜き出し掲載した。

『一遍上人行状図』の翻刻（吉田）



袋綴

『一遍上人行状図』の翻刻（吉田）

一遍上人行状図（木版画・江戸末期刊）

冠 註	本 文	書 き 下 し 文
「巻上」題額字 一遍上人行状圖 （袋綴題字） 越知―「俗姓は越智」「聖絵」 「伊豫州越智姓」「年譜略」	高祖一遍聖人行状圖 〔第一段〕 河野畧譜 孝靈帝皇孫小千王末裔越知押領使 好方十三世 。親清 三島四郎 伊豫權介 藤原姓 通清 伊豫權介 通信 四郎 伊豫守護職 通廣 七郎 称 ^ス 「如佛入道」 通朝 別府七郎 祝髮 ^ス 称 ^ス 「如道」 伊豫房 開祖 一遍上人 初名随縁又智真 仙阿 号 ^ス 「伊豆房」 聖戒 俗称通定	高祖一遍聖人行状図 〔第一段〕 河野畧譜 孝靈帝皇孫小千王末裔、越知押領使好方十三世 。親清 三島四郎 伊予權介 藤原姓 通清 伊予權介 通信 四郎 伊予守護職 通広 七郎 如佛入道と称す 通朝 別府七郎 祝髮して如道と称す 伊予房 開祖 一遍上人 初名は随縁また智真 仙阿 伊豆房と号す 聖戒 俗称は通定

「河野四郎通信之孫
河野七郎通廣之次
男也」『年譜略』
「誕生號松壽丸」〔同
右〕
墓臺一合
秘蹟一秘奥の真理
『聖絵』①『續群書
類從』九輯上「秘
願」②「日本絵巻
物全集」10・「日本
絵巻大成別巻」「秘
蹟」③「岩波文
庫」本、青321—1
「秘蹟」
ルビの「(ヒ)タク」
はミス

蘊奥一蘊奥
喪一喪、國一國、
遂一還、宜揚一宣
揚
「文永元甲子改名智
真」『年譜略』
恩一恩、兒一兒、
戲一戲、渦一渦

開祖一遍。世伊豫甲族。俗姓河野。父曰ニ
通廣。以ニ延應元年二月十五日ニ生。乳名
松壽生。而聡慧。十歳ニ喪。持始悟。塵寰之
無常。建長中奉ニ怙命。剃度。稍長。適ニ宰府。
問道僧聖達。達諭曰。欲學レ佛宜ニ先識レ字。
祖乃之ニ肥前ニ肄業於僧華臺。随從一冉
年。學業累積。墓嘆ニ異其器骨不凡。令ニ就
達稟。淨教之秘蹟。時年厘十六。

〔第二段〕

祖達ニ會下ニ十二年。遂通ニ浄土之教
門。領ニ真宗之蘊奥。弘長三年丁ニ父憂ニ
奔喪本國。自願以還。宜揚大道。勵ニ勤
修。洞闡真門。利ニ群萌。或混躅塵俗。施ニ
恩恤。有レ時伴ニ兒童戲。一朝觀ニ所弄之
輪鼓墜。地渦旋立。止。頓會輪廻。出塵

開祖一遍、世々伊予の甲族、俗姓河野。父通広
と曰ふ。延應元年二月十五日を以て生まる。乳名
松寿、生れて聡慧、十歳にして侍(ニ母)を喪な
ひ始めて塵寰(ニ天下・人間界)の無常を悟る。
建長中、怙(ニ父)の命を奉け剃度す。稍長じて
宰府に適きて、道を僧聖達に問ふ。達諭して曰
く、佛を学ばんと欲せば宜しく先づ字を識るべ
し。祖乃ち肥前に之き、業を僧華台に肄ふ。随從
一冉年。学業累りに積もる。台、其の器骨不凡な
るを嘆異し、達に就て浄教の秘蹟(ニ奥義)を稟
けしむ。時に年厘かに十六。

〔第二段〕

祖、達の会下に侍する十二年、遂に浄土の教門
に通じ、真宗の蘊奥を領ず。弘長三年、父の憂に
了り、喪に本国に奔る。願より以還、大道を宣揚
して勤修を励み、真門を洞闡して、群萌を利す。
或ひは躅を塵俗に混じて恩恤を施こし、時有て
は兒童の戲に伴なふ。一朝、弄する所の輪鼓、地

『一遍上人行狀圖』の翻刻（吉田）

冠 註	本 文	書 き 下 し 文
毀―毀 詣―詣 互日 互日、一日 中の意。ルビは 「コウジツ」。皆― 時 廬―廬 无―無、國―國、 等―等	之念不_レ能_レ禁_{スル}。西謁_ニ達_ニ於_ニ宰府_ニ叙_ニ其本 願_ヲ。此時季弟通定亦毀_レ形爲_レ僧。更_ニ其名_ヲ 聖戒_ト隨_レ之_ニ。 〔第三段〕 文永八年春。祖詣_リ信濃善光寺_ニ。供奉 巨日方_ニ斯皆_ニ願_ニ善導已證之法門_ヲ描_ニ 二河遣迎之本尊_ヲ。 〔第四段〕 其年之秋。祖構_ニ架精廬_ヲ於_ニ州之窪寺_ニ。 舖張_ニ二河之畫佛_ヲ于東壁_ニ。鎖_レ戸絶_ニ客_ヲ。 別行結願日夜不_レ輟_{ヤマ}。其佛側所_ニ掲_レ之 贊頌_ニ曰 十劫正覺衆生界 一念往生弥陀國 十一不二證无生 國界平等坐大會	に墜ち渦旋立つところに止むを觀て、頓に輪廻_{りんね}を 会し、出塵の念、禁_{あた}ずる能_{あた}わず。西、達_ニに宰府に謁 して、その本願を叙_のぶ。この時、季弟通定また形 を毀_{やぶ}りて僧と爲_なせり。名を聖戒_{あらた}と更_{あらた}め之に隨_{したが}ふ。 〔第三段〕 文永八年春、祖、信濃善光寺に詣り、供奉巨 日、斯時_{このとき}に方り、善導已証の法門を願_{あた}はし、「二 河遣迎の本尊」を描く。 〔第四段〕 その年の秋、祖、精廬_{せいろう}を州の窪寺に構架し、二 河の画佛を東壁に舖張_{ふしやう}して、戸を鎖_{くさ}し客を絶ち て、別行結願、日夜輟_やまず。その佛側、掲ぐる所 の贊頌に曰く 十劫に正覺す衆生界 一念に往生す弥陀の国 十と一とは不二にして無生を証し 国と界と は平等にして大会に坐す

(文永十年)

場場

此此、屢屢

冥冥

飄飄

踪踪

處處、邊邊、
隨隨

〔第五段〕

州内浮穴郡菅井山有古寺焉。觀音大士。山中靈迹往々有焉。又有僧空海行場安。自彫不動明王。十年秋祖獨。將聖戒戢影於此。屢感靈夢。頻加冥佑。於是乎猛然立誓。斷割恩愛於血族。施與堂宇於三寶。飄々出山。遊行海内。不駐踪一所。以普度俗。為處世之行課。身邊隨物。正本尊暨所依經典而已。

〔第六段〕

(二月八日)
携携、超超
號號
臨臨
去去
十一年春、携超一超二念佛坊三徒弟。辞郷貫向羈旅。聖戒護送數日。行至櫻井。祖授以親墨名號并十念。苦期。同生于花開。約再會于臨終。師弟同胞揮泣。各去東西。

〔第五段〕

州内浮穴郡菅井山に古寺有り。觀音大士を奉ず。山中靈迹往々にあり。又た僧空海の行場に自彫の不動明王を安んずる有り。十年秋、祖、独り、聖戒を將ひ影を此に戢む。屢々靈夢を感じ、頻りに冥佑（＝神仏の加護）を加はる。是において猛然立誓し、恩愛を血族に断割し、堂宇を三宝に施与し、飄々として山を出て、海内に遊行して踪を一所に駐めず、一ばら道俗を普度するを以て、処世の行課と為す。身邊の随物、正本尊暨び所依の經典のみ。

〔第六段〕

十一年春、超一・超二・念佛坊の三徒弟を携さえ、郷貫を辞して羈旅に向かふ。聖戒護送（すること）數日、行々桜井に至る。祖、授くるに親墨の名号并に十念を以てし、苦に同生を花開に期し、再会を臨終に約し、師弟同胞、泣を揮ひ各々東西に去る。

『一遍上人行狀圖』の翻刻（吉田）

冠 註	本 文	書 き 下 し 文
薩埵—薩埵、垂— 垂、遠—遠 路—路、場場 號—號、起—起 擇—擇	〔第七段〕 同年抵^{イタリ}撰津天王寺^ニ。瞻^シ禮^シ如來^ヲ。發願^{シテ}奉^{サテ}十種制文^ヲ。專^ラ勸^{メテ}一遍念佛^ニ以^テ迷執^ニ。 〔第八段〕 既^ニ而辭^シ天王寺^ヲ。南遊^{ソフ}高野山^ニ。親^{シク}探^リ三地薩埵^ノ之垂迹^ヲ。遠^ク託^ス九品淨土^ノ之同生^ニ。 〔第九段〕 其夏轉^{シテ}路^ヲ入^リ熊野^ニ。歷^{アマ}拜^{ネク}靈場^ヲ。山中偶々值^ヒ一僧^ニ。予^ニ名號^ヲ。僧^ヲ以^テ信念^ニ不起^ス辭^ス。強^テ授^ク之^ヲ。旋^ニ而祖^{オモキ}趨^ニ證誠殿^ニ。質^タ諸神明^ヲ。忽^{マチ}現^ス皓髮道士^ヲ於^ニ恍惚^ニ間^ニ。前^ハ警^メ曰^ク。師之勸進^ヲ太^{ハナ}違^{ヘリ}佛證^ニ。今^ハ後^ニ不^レ擇^ラ信^ニ不^レ嫌^ハ淨不淨^ヲ。可^ニ以^レ付^レ符^ヲ。只^タ觀化童^ヲ爭^メ繞^リ。各^ヒ乞^フ符^ヲ同音唱佛^{シテ}而^ル去^ル。祖喜^{ンデ}曰^ク。今也。	〔第七段〕 同年、撰津天王寺に^{いた}抵り、如來を瞻禮し、發願して十種の制文を奉げ、專^さばら一遍、念佛を勧め、以て迷執を醒^さます。 〔第八段〕 既に天王寺を辭し、南、高野山に遊ぶ。親しく三地薩埵の垂迹を探り、遠く九品淨土の同生を託す。 〔第九段〕 その夏、路を転じて熊野に入り、歴^{あま}なく靈場を拝す。山中、偶々一僧に値ひ名号を^{あた}予ふ。僧、信念起らざるを以て辭す。強^やひて之を授く。旋^やありて祖、証誠殿に趨^{おもひ}き、諸^{これ}を神明に質^たす。忽^{たち}まち皓髮の道士を恍惚の間に現^すす。前^{いま}み警^{いま}めて曰く、師の勸進、太^{はな}だ佛証に違^はへり。今後は信不信を^え扱^えばず、淨不淨を嫌はず、以て符を付すべし。只^みだ觀

奉^{ウケ}權化之神託^ヲ。逾^ス他力本願之深意^ヲ。

〔第十段〕

祖遙^{ルカニス} 寄^ツ木符於聖戒^ニ。其文曰。

南無阿彌陀佛^{六十萬人決定往生}
判釋意味深遠。今畧^レ之。

頌

六字名號一遍法 十界依正一遍體

萬行離念一遍證 人中上上妙好華

建治初。巡^テ西北^{カヘリ}回^ニ本國^ニ。顯^{モス}度^ニ有緣^ヲ。群

弟子嘗^テ作^ス管弦會。祖詠^シ歌誡^メ曰。

逗^ツ酒^ノ句^ハ你^ニ也。奈^ナ尼^ニ絆^ハ母^ハ能^ハ利^ハ迺^ハ。

苦^ツ乃^ハ播^ハ婆^ハ。安^ア斯^シ訶^カ理^リ氣^ケ理^リ登^ト。於^ヲ墓^モ

斐^ヒ戶^シ流^ル倍^ベ之^ヲ。

る化童、争^めひ繞^り、各おの符を乞ひ、同音唱佛して去る。祖、喜んで曰く、今や權化の神託を奉^うけ、逾^{いよいよ}他力本願の深意を了ず。

〔第十段〕

祖、遙かに木符を聖戒に寄す。其の文に曰く

南無阿彌陀佛／決定往生、六十萬人
判釈するに意味深遠。今之を略す。

頌

六字の名号は一遍の法なり 十界の依正は一

遍の体なり

万行離念は一遍の証なり 人中上上の妙好華

なり

建治の初、西北を巡^{めぐ}て本國^{かえ}に回^もり、顯^{もつ}ら有緣^ばを

度す。群弟子、嘗て管弦の会を作す。祖、歌を詠

じて誡めて曰く

つのくにや、なにはもののりの、ことのはは、

あしかりけりと、おもひしるべし

號^ニ號^ニ
華^ニ華^ニ
回^ニ回^ニ、國^ニ國^ニ
緣^ニ緣^ニ
虛^ニ虛^ニ
於^ニ於^ニ

遙^ニ遙^ニ、寄^ニ寄^ニ
木符^ニ形^ニ木^ニ『聖絵』
釋^ニ釋^ニ、畧^ニ略^ニ

冠 註	本 文	書 き 下 し 文
（建治二年）比歲_ニ比年、毎年の意 歲_一歲、復_一復 嘆_一嘆 屢_一屢	〔第十一 段〕 比_{シキリノトシマデ}歲_{ムキ}復_ニ赴_ス宰府_ニ省_ス聖達_ヲ達_ニ大喜_ニ俱浴_ニ 澡堂_ニ細_{カニ}叩_キ道義_ヲ論_ヲ修_ヲ行_ヲ達_ニ問_テ曰_ク公平 生_ニ不_レ勸_ニ十_ニ念_ニ只_ヲ顧_ル勸_ニ一_ニ遍_ニ何_ニ也_{ソヤ}祖應_{スルニ} 以_ニ十_ニ一_ニ不_レ二_ニ之_ニ義_ヲ達_ニ感_ニ嘆_ニ曰_ク他_ニ受_ニ一_ニ 遍_ヲ我_ニ受_ニ百_ニ遍_ニ便_{ハチ}執_リ弟_ニ子_ニ禮_ヲ虔_ツ歎_ニ百_ニ遍_ニ 念佛_ヲ	〔第十一 段〕 比_{しきりのとし}歲_ニ復_ニた_ニ宰府_ニに赴_ハむき聖達_ヲを省_スす。達_、大 いに喜び俱に澡堂へ浴し、細かに道義を叩き、修 行を論ず。達、問て曰く、公、平生十念を勧め ず、只顧_{ひたすら}、一遍を勧むるは何ぞや。祖、応ずるに 十一不二の義を以てす。達、感嘆して曰く、他は 一遍を受く、我は百遍を受けんと。便はち弟子の 礼を執り、虔しんで百遍の念佛を歎く。
武冕_ニ武弁、武士 のこと 嗽盥_ニたらいで口 すぐ 驕_ニ兀_ニおごりたか ぶる 怪_一怪 賞讃_一賞讃、嘗_一 嘗_一値_一値、矣_一 矣	〔第十二 段〕 筑前遍参_ノ日_ニ偶_{タマ}到_ル一_ニ武冕_ノ家_ニ主人_{ハチ}便_{ハチ} 整_ノ衣_ヲ嗽盥_{シテ}迎_レ接_セ受_ニ念_ニ佛_ヲ亦_{ハチ}不_レ語_ヲ他_ヲ祖 出_ヲ主人_{ハチ}謂_テ客_ニ曰_ク彼_ニ僧_ニ自_ニ尊_ニ驕_ニ兀_ニ可_レ謂_フ 日本_一一_ニ狂_ニ惑_ニ者_ニ也_{ソヤ}客_ニ怪_ニ問_ニ曰_ク那_ニ爲_ニ受_ニ 念佛_ヲ於_ニ狂_ニ惑_ニ者_ニ主人_{ハチ}曰_ク念_ニ佛_ニ無_ニ二_ニ狂_ニ惑_ニ一_ニ 祖亦_{ハチ}賞_ニ讃_ニ曰_ク人_ニ中_ニ未_ニ嘗_ニ値_ニ遇_ニ如_ニ箇_ニ信_ニ 徒_ニ一_ニ矣_ニ	〔第十二 段〕 筑前遍参の日、偶_{たま}たま一武冕_ノの家_ニに到る。主 人、便はち衣を整_{そうかん}へ嗽盥_ニして迎_レ接_セし、念佛を受 け、また他を語らず、祖、出づ。主人、客に謂_いて 曰く、彼の僧自尊驕兀、謂つべし、日本一の狂惑 者なり。客怪しみ問て曰く、那_{なんすれぞ}為_ニ念佛_ヲを狂惑者 に受く。主人の曰く、念佛に狂惑なし、と。祖、 また賞讃して曰く、人中、未だ嘗_かて箇_ニくの如き信 徒に値遇せず。

處―處

黎―黎

響接|| 膺接・應
接。懷|| 懷
卽|| 卽 罰|| 罰
此|| 此 餘|| 餘

(弘安二年)

座―座

夢―夢

〔第十三段〕

時機縁未^レ熟被^レ化者罕^ニ少^一。以^テ故供遺
不^レ繼衣鉢乏絶^{ナレ}。祖處^テ之晏如也。
謁^ニ大隅八幡宮^一日。神詠曰
騰^{コト}許斗麼珥^{ハニ}。南無阿彌陀佛等。刀
那布黎婆南無阿彌陀佛迹。菟麻
連許蘇秀禮。

〔第十四段〕

歴^ニ豊後^一至^ニ備前^一。某妻篤^ニ悦^ニ其教^一為^レ尼。
某怒^{ツテ}擬^{セント}害^ヲ祖^ヲ。祖雍接坦然。某深懷慚
恨。卽^ニ下^ニ罰^一髮列^ニ徒弟^一。此間靡^レ化為^レ僧
者。前後二百八十餘人。

〔第十五段〕

二年春祖再^{タビ}上^{シテ}洛^{イタル}。因^ニ幡堂^一有^リ寺法。
不^レ許^サ遍參僧止^ニ住^一堂^ニ內^一。祖因^ニ占^一座堂
外^ニ。念々唱佛。迨^{オヨビ}夜闌^ニ。適^{タマク}寺主覺順夢^{ムラク}

〔第十三段〕

時に機縁未だ熟せず、被化の者罕少。故を以て
供遺、継かず。衣鉢乏絶なれども、祖、之に処し
て晏如たり。大隅八幡宮に謁する日、神に詠じて
曰く

とことには、なむあみだぶと、となふれば、
なもあみだぶに、うまれこそすれ

〔第十四段〕

豊後を歴て備前に至る。某の妻、篤くその教を
悦び尼となる。某、怒つて祖を害せんと擬す。
祖、膺（応）接坦然。某、深く慚恨を懷き、即
下、髪を罰て徒弟に列す。この間、化に靡き僧と
為る者、前後二百八十余人。

〔第十五段〕

二年春、祖、再び上洛して、因幡堂に踵る。
寺法あり。遍參僧、堂内に止住するを許さず。
祖、因て座を堂外に占め、念々唱佛す。夜闌に迨

『一遍上人行狀圖』の翻刻（吉田）

冠註	本文	書き下し文
實一寶 迎一迎、欸一欸、 還一還 欸誠一まごころ・ 忠実の意 驚一驚、眞一眞、 還一還 権輿一はじまり 蓋一蓋、裏一裏 繹一繹 堵一かき 兼一承 國一國、紫一紫 豪一豪、踊一踊 或一或 寄一寄	〔第十六段〕 踊念佛蓋権輿于空也。當時機法未熟。利益殆鮮矣。今茲祖緬繹其絶響。重修於信小田切邸。結縁者如堵。嗣后相承。定為二期之行式。先是再入信。布化國內。時有紫雲瑞。觀者以為熟機之應驗。 寓近江守山時。山僧重豪詰踊念佛。祖言下以歌應。或僧謂曰心以為主。外相何有。亦寄歌答其意。二歌載縁	び、適たま寺主覚順夢むらく。本尊薬師佛詰げて曰く、我、大寶を得たり。現に堂外に在り。宜しく駿迎して以て欸誠を尽くすべし。順、驚覚し遽かに祖を内陣に延き饗待奔走し、諸れを廊上に舍す。顧ふに佛、祖師化導の願榮を慰れみ、深く冥護を垂るる者か。是に依りて祖、留錫奉侍し、延いて八月に至る。 〔第十六段〕 踊念佛は、蓋し空也に権輿す。當時機法未だ熟せず。利益殆んど鮮なし。今茲祖、緬かにその絶響を繹ね、重ねて信の小田切邸に修す結縁者、堵の如し。嗣后相承し、定めて一期の行式と為る。是れより先、再び信に入り、化を国内に布く。時に紫雲の瑞あり。観る者、以て熟機の応驗と為す。近江守山に寓する時、山僧重豪、踊念佛を詰じ。祖、言下に歌を以て応ふ。ある僧謂て曰く、心以て主と為す、外相何んか有ん。また歌を寄せ

起—起

起。可_ニ往_テ觀_ル。

て、その意に答ふ。二歌、縁起に載せたり。往_{ユキ}て觀るべし。

頃—頃、佐—佐

郎—郎、業—業

慇—慇、歲—歲

數—數

踊—踊、棧板—棧板
たじぎ、毀—毀

〔第十七段〕

弘安二年_{ノコロホヒ}頃_{ト云}。信濃佐久郡_{モクシ}有大井太
郎_{ト云}者_ヲ。夙_{フツ}薰_{フニン}沐_{モクシ}祖德_{ソトク}、專念_{センネン}之業_{ノノリ}不_レ捨_テ晝
夜_ヲ。其女_メ兒_コ無_ク道心_{ダウシン}。悠々_{ユウユウ}送_ス二歲月_ニ。一夜_ヲ
會_{カフ}夢_{ユメ}下_ノ無數_{ムスズ}佛_{ブツ}繞_{マワ}屋_ヤ行道_{ギョウダウ}中有_ニ一巨佛_{キョウブツ}
名_ナ曰_{ハク}一遍_{ヒトマニ}。方_{アタリニ}時_{トキ}女兒_{メコ}幡然_{ハンゼン}回_{マワ}志_シ。請_テ祖
踊念佛_{ユダマブツ}者_ヲ連_{ツキ}三日夜_{サンニツキ}。棧板_{サンバン}為_レ之_ノ毀裂_{クハレ}。
家人_{イタナシ}請_フ修_{セウ}之_ノ女兒_{メコ}曰_{ハク}。母_{ハハ}以_テ存_{ゾク}二景迹_ニ。
永_{トキ}為_レ三聖人_{サンセイジン}之記念_{ノキネン}。

〔第十八段〕

過_ス三下野_{サンゲノ}小野寺_{コノノジ}。日逢_{ヒツキ}急雨_{キツアメ}。一行_{イツギョウ}僧尼_{ソウニ}
衣衲_{イナ}淋漓_{リンリ}。各脱卸_{ダツシヤンテ}嘆_{ナガメ}之_ノ。祖_ソ為_レ歌_カ曰_{ハク}
賦_フ良_ラ婆_ハ怒_イ禮_レ。怒_イ流_{リウ}禮_レ婆_ハ和_ワ區_ク。蘇_ソ
題_{テイ}乃_ノ宇幣_{ウヘ}曰_{ハク}。安賣_{アメト}斗帝_{トテ}怡徒_{イテ}布_フ。弭_ミ

〔第十七段〕

弘安二年_{ノコロホヒ}の頃_{ト云}、信濃佐久郡_{モクシ}に大井太郎_{ダイエイタロウ}と云う
者_ヲ有り。夙_{フツ}に祖德_{ソトク}に薰_{フニン}沐_{モクシ}し專念_{センネン}の業_{ノノリ}、晝夜_{シヤヤ}を捨て
ず。其の女_メ兒_コ道心_{ダウシン}なく、悠々_{ユウユウ}歲月_{ゲツグツ}を送る。一夜_{イツヤ}、
會_{カフ}無數_{ムスズ}の佛_{ブツ}、屋_ヤを繞_{マワ}り行道_{ギョウダウ}中に一巨佛_{キョウブツ}あり。
名_ナづけて一遍_{ヒトマニ}と曰ふと夢む。時に方_{あた}り女兒_{メコ}、幡然_{ハンゼン}
志_めを回_{めぐ}らし、祖_ソを請_テて踊念佛_{ユダマブツ}する者_ヲ、連_{ツキ}三日夜_{サンニツキ}、
棧板_{サンバン}、之_ノが為_ニに毀裂_{クハレ}す。家人_{イタナシ}之_ノを修_{セウ}せんと請_フふ。
女兒_{メコ}曰_{ハク}く、以_テてする母_{ハハ}かれ。その景迹_{ケイシキ}を存_{ゾク}して、
永_{トキ}く聖人_{セイジン}の記念_{キネン}とせん。

〔第十八段〕

下野_{ゲノ}小野寺_{コノノジ}を過_スぐる日_ヒ、急雨_{キツアメ}に逢_フふ。一行_{イツギョウ}の僧
尼_{ソウニ}、衣衲_{イナ}淋漓_{リンリ}、各_{オノオノ}の脱卸_{ダツシヤンテ}して之_ノを嘆_{なげ}かす。祖_ソ、
歌_カに為_ナりて曰_{ハク}く
ふらばぬれ、ぬるればかわく、そでのうへ

「ふればぬれ」『絵
詞伝』

『二遍上人行狀圖』の翻刻（吉田）

冠註	本文	書き下し文
屢屢 於於 慕慕 邁邁 等 墳墓 余 微	妬叙^{トゾ}屢^ハ迦^カ儺^ナ岐^キ。 時衆^ト尼^ニ遭^レ事^シ發^{ハス}志^シ。其^{イカリヲ}戒^メ詞^ヲ。 矩^ク墓^モ登^ト難^{ナル}屢^ル。祁^ケ霧^ム理^リ奈^ナ哆^ト氏^シ層^{ソウ}。阿^ア 摩^マ能^ノ破^ハ良^ラ。都^ツ企^キ波^ハ於^オ酒^{サウ}黎^レ止^ト。何^カ殊^ス 牟^ム慕^モ乃^ノ訶^カ播^ハ。 〔第十九段〕 三年邁^{ユキ}陸奥^{リクオ}過^グ白川^{ハクカワ}関^ヲ。題^ノ於^ニ神祠^{カミナリ}柱^ハ。 日 愈^{ユク}句^コ譬^ヒ徒^ト汗^ヲ。瀾^{ミダ}儼^ノ迺^チ旃^カ箇^ヒ臂^ニ。莫^モ 邏^ラ遮^サ奴^ジ等^ト。奈^ナ袁^{エン}古^コ素^ソ苦^ク武^ム連^{レン}。斯^シ良^ラ 迦^カ波^ハ農^{ノウ}細^セ枳^キ。 入^リ江^エ刺^{サシ}郡^ノ掃^{ハラヒ}祖^ニ父^ノ通^ノ信^ヲ墳^ヲ。懇^{チム}修^{コロニス}轉^ス經^ス。 念^ヲ佛^ヲ。其^{センジノ}薦^ニ誠^ノ歌^ヲ。三^三首^首今^今節^節二^二。 破^ハ嘉^カ那^ナ志^シ奈^ナ。始^{ハシ}糜^ミ尸^シ介^カ婆^バ泥^ネ迺^ノ。久^ク 遲^チ怒^ヌ富^フ杼^{シュ}。能^ノ麼^マ良^ラ迺^ノ菟^ツ菟^ツ癡^チ半^ハ。余^{ヨソ}序^序。 尼^ニ微^ミ曳^エ氣^ケ李^リ。	を、あめとていとふ、ひとぞはかなき 時衆の尼、事に遭ひ、恚を発す。その戒の詞 くもとなる、けむりなたてそ、あめのはら、 つきはをのれと、かすむものは 〔第十九段〕 三年、陸奥に邁き、白川の関を過ぐ。神祠の柱 に題して曰く ゆくひとを、みだのちかひに、もらさじと、 なをこそとむれ、しらかはのせき 江刺郡に入り、祖父通信の墳を掃ひ、懇に転經 念佛を修す。その薦誠の歌 三首今節二 はかなしな、しばしかばねの、くちぬほど、 のはらのつちは、よそにみえけり

〔弘安四年〕
兎棍^ニわるもの
掣^ニ一撃、又木^ニま
たふり『聖絵』
幽略^ニ幽掠、かす
めとる
懣惱^ニ「障礙」^ニ聖
絵^ニ「娠惱」のミ
スか？「悩みを
はらむ」
園^ニ園、婚^ニ婚
錢五十緡、「鳶眼五
十貫」『聖絵』^ニ年
譜略^ニ。業^ニ業

〔弘安五年〕
鎌^ニ鎌、此^ニ此、
易^ニ易

児囊坂、「小袋坂」
『聖絵』^ニ年譜略^ニ
數^ニ數

厩^ニ虐、雨^ニ雨

〔第二十段〕

陸奥勸化紇^ニ、但^ニ常陸^ニ、國^ニ之兎棍^ニ、時衆^ニの
時衆^ニ、其^ニ人夢裡^ニ有^ニ異僧^ニ、手^ニ掣^ニ一又木^ニ。
痛^ニ撞^ニ之^ニ、日^ニ爾^ニ懣惱^ニ行者^ニ、其^ニ太^ニ無道^ニ。
己^ニ悟^ニ遍身^ニ麻木^ニ不^ニ能^ニ少^ニ動^ニ。其^ニ父^ニ泣^ニ頻^ニ。
乞^ニ拔^ニ濟^ニ。祖^ニ乃^ニ往^ニ對^ニ其^ニ人^ニ。疾^ニ苦^ニ立^ニ痊^ニ。又
有^ニ二^ニ信^ニ人^ニ。至^ニ心^ニ邀^ニ祖^ニ供^ニ養^ニ三七^ニ日^ニ。日
後^ニ掃^ニ庭^ニ園^ニ。偶^ニ拾^ニ錢^ニ五十^ニ緡^ニ于^ニ溝^ニ内^ニ。人
以^ニ為^ニ現^ニ業^ニ之^ニ所^ニ感^ニ。

〔第二十一段〕

五年春^ニ將^ニ行^ニ鎌倉^ニ示^ニ時衆^ニ曰^ニ。視^ニ此^ニ行^ニ
之^ニ難^ニ易^ニ。可^ニ以^ニ定^ニ化^ニ益^ニ之^ニ有^ニ無^ニ。我^ニ道^ニ設^ニ
令^ニ不^ニ行^ニ乎^ニ。以^ニ鎌倉^ニ為^ニ死^ニ所^ニ。至^ニ則^ニ會^ニ值^ニ
執^ニ權^ニ北^ニ條^ニ氏^ニ于^ニ児^ニ囊^ニ坂^ニ。喝^ニ道^ニ數^ニ聲^ニ避^ニ
路^ニ。祖^ニ不^ニ聞^ニ衝^ニ節^ニ。前^ニ驅^ニ怒^ニ撻^ニ。師^ニ弟^ニ連^ニ下^ニ。
極^ニ口^ニ罵^ニ詈^ニ。祖^ニ無^ニ痛^ニ色^ニ。徐^ニ言^ニ曰^ニ。既^ニ陷^ニ凌^ニ
虐^ニ。今^ニ將^ニ安^ニ之^ニ。應^ニ期^ニ畢^ニ命^ニ於^ニ此^ニ爾^ニ。吏^ニ纔^ニ

〔第二十段〕

陸奥勸化紇^ニ、常陸^ニに徂^ニく。國^ニの兎棍^ニ、時衆^ニの
尼^ニを幽略^ニす。その人、夢裡^ニに異僧^ニあり。手^ニに又木^ニ
を掣^ニぎ、痛^ニく之^ニを撞^ニき、言^ニつて曰^ニく、爾^ニ、行者^ニを
娠惱^ニす。それたゞ無道^ニなりと。己^ニに悟^ニり遍身^ニ麻木^ニ
し少しも動^ニく能^ニはず。その父^ニ泣^ニひて頻^ニりに拔^ニ濟^ニを
乞^ニふ。祖^ニ、乃^ニはち往^ニてその人^ニに對^ニす。疾^ニ苦^ニ立^ニちど
ころに痊^ニゆ。また一^ニ信^ニ人^ニ有^ニり。至^ニ心^ニ祖^ニを邀^ニへ供^ニ養^ニ
三七^ニ日^ニ。日後^ニ、庭^ニ園^ニを掃^ニふとき、偶^ニたま錢^ニ五十^ニ緡^ニ
を溝^ニ内に拾^ニふ。人^ニ以^ニて現^ニ業^ニの所^ニ感^ニと爲^ニす。

〔第二十一段〕

五年春^ニ、將^ニに鎌倉^ニに行^ニかんとす。時衆^ニに示^ニして
曰^ニく、この行^ニの難^ニ易^ニを視^ニて、以^ニて化^ニ益^ニの有^ニ無^ニを定^ニ
むべし。我が道^ニも設^ニけて行^ニなはずんばや。鎌倉^ニ
を以^ニて死^ニ所^ニとせんと。至^ニれば則^ニち會^ニ執^ニ權^ニ北^ニ條^ニ氏^ニ
に児^ニ囊^ニ坂^ニに値^ニふ。喝^ニ道^ニ數^ニ聲^ニし路^ニを避^ニけしむ。祖^ニ、
聞^ニかざるごとく節^ニを衝^ニく。前^ニ驅^ニ怒^ニり師^ニ弟^ニを撻^ニつこ
と連^ニ下^ニ、口^ニを極^ニめて罵^ニ詈^ニす。祖^ニ、痛^ニめる色^ニなく徐^ニ

『一遍上人行狀圖』の翻刻（吉田）

冠 註	本 文	書 き 下 し 文
鮮↓解 厚―厚 旬餘―十日あまり 蒙―蒙	鮮^キ威^ヲ逐^フ之^ヲ。闔^ニ鄉^ヲ奔^{シテ}波^ク。厚^ク哀^ニ師^ヲ弟^ヲ。供^{スル}敬^ヲ。 旬餘。度生^ノ者^ヲ以^テ千^ノ數^ヲ。 〔第二十二段〕 五年春卓錫。片瀨地藏堂。斷食^{シテ}別行^ス。信緣景。屬。其時紫雲屢。弥^ニ空^ニ。天頻^{リニ}雨^{ラス}。妙華。或問^フ其理^ヲ。祖曰不^レ識^シ其時^ヲ詠^ニ曰^ニ。 二首 節一 磋^サ氣^ケ婆^バ磋^サ紀^キ。知^チ連^レ婆^バ於^ニ酒^ノ禮^レ止^チ。遲^チ流^ハ半^ハ奈^ナ能^ネ。基^{コト}止^ハ波^ハ里^リ爾^ニ虛^ニ叙^ス。微^ミ波^ハ那^ナ利^リ爾^ニ祁^ケ例^レ。 投^{スル}伊^イ豆^ス三^ミ島^ノ一^ニ日^ヲ。時衆同時就^{ニク}叙^ス者^ニ七^ニ八^ニ人^ヲ。祠官不^レ忌^シ之^ヲ結^ス緣^ヲ。一罔^{モナシ}下^ニ蒙^タ崇^リ者^上。八人。祠官不^レ忌^シ之^ヲ結^ス緣^ヲ。一罔^{モナシ}下^ニ蒙^タ崇^リ者^上。可^レ見^ル下^ニ和^ニ光^ニ利^ニ物^ニ之^ヲ誓^ヲ無^ク間^ニ於^ニ生^ニ死^ニ一^ニ也^ヲ。	かに言て曰く、既に凌虐に陥いる。今、将^{ハタイ}安^イくんか之^ヲかん。応に畢命を此に期すべきのみと。吏、纔^{ワザ}かに威を解き之を逐ふ。闔^ニ鄉^ヲ奔^{シテ}波^クして厚^ク師^ヲ弟^ヲを哀^ミれみ、供^ク敬^スすること旬余、度生^ノの者、千を以て数ふ。 〔第二十二段〕 五年春、片瀨の地藏堂に卓錫し、斷食して別行す。信緣景のごとく属く。その時、紫雲屢しば空に弥^{ワタ}り、天頻りに妙華を雨ふらす。或るひと、その理を問ふ。祖、曰く、識らず。その時の詠に曰く 二首節一 さけばさき、ちればおのれと、ちるはなの、ことほりにこそ、みはなりにけれ 伊豆三島に投ずる日、時衆、同時に叙に就く者七八人。祠官、之を忌まずして結縁す。一も崇りを蒙ぶる者なし。和光利物の誓、生死に間^ヘてなきを見るべし。

「卷下」題額字

藤澤山清淨光寺藏版

藤沢山清淨光寺藏版

此此

〔第二十三段〕

此秋西趣ニ京師。鰻坂入道者諦聴末
期持念。約日應俟行於蒲原。晋及富
士河。便下馬約其絆繩。於腰間謂從
僕曰。我聞臨終唱名。佛即來迎。稱名
十聲。躍入水。爾時紫雲纓翬。音樂聞
空。頃之。開水觀之。死相端嚴猶若生。

迎迎、稱稱

死死

祖誅曰
舉々慮衰廢。珥志尔架該比迦。難
餓禮喻玖。未頭迺馬幣那屢。安半
令遙迺奈箇。

舉舉、願慮

屢屢

祖誅曰
舉々慮衰廢。珥志尔架該比迦。難
餓禮喻玖。未頭迺馬幣那屢。安半
令遙迺奈箇。

遙遙

〔第二十四段〕

祖属日報ニ託磨法印ニ書有レ曰
一稱名號中 三尊垂化用

属日ニ単に「属」・
「今属」とも
號號、垂垂

〔第二十四段〕

祖、属日、託磨法印に報する書に曰へる有り
一称名号の中に 三尊化用を垂れ

『一遍上人行狀圖』の翻刻（吉田）

冠 註	本 文	書 き 下 し 文
座―座 願―慮 已↓己 它―他 甚―甚 脇―脇 夢―夢 座―座	〔第二十五段〕 六年行^ス法于尾張甚目寺^ニ。資糧中^{ナカゴロツキ} 竭^ツ 人有^{ヒトリ}二憂色^ニ。祖厲^{ハコマシテ} 曰^{ハク}。糧盡^{カテツクルトモ} 法命無^{ハシ}盡^{クル}。汝^{ツトニ} 曹^{ハヤク}力^{ツテ} 哉^シ。寺之脇尊^{ツテ}。毘沙門天靈應夙^{ツトニ} 著^{イナシ}。其夜萱野^{カヤノ}二富人同時有^レ夢^ヲ。天王^{ツテ} 臨告^{シテ} 曰^{ハク}。有^ニ尊客^ニ。疾^{ハヤク}来^{ツテ} 可^シ以^テ供給^ス。二人^ニ 卒^ニ調^ニ。差具造^ニ祖許^ニ。適^{タマク} 風卷^{タマク} 壇帷^{アラハス} 露^{アラハス} 佛^ヲ。 衆進^{シテ} 拜^{スルニ} 之天王離^レ座鴻立^{マサシクタリ}。政^{マサシクタリ} 似^ニ逆^レ祖^ヲ	十方衆生の前に 九品の来迎を顕わす くもりなき、そらはもとより、へだてねば、 ころぞにしに、ふくるつきかげ 尾張の信者二宮某、疾病なり。一たび祖に觀え 以て旧約を償なはんと希ふ。髣髴中、祖、現前し 西に嚮て引接するの状あるを觀て、心地歎喜し奄 忽として逝く。その他、専修篤信、素懷を遂げる 者、前に生阿あり、後に能念あり。 〔第二十五段〕 六年、尾張の甚目寺に行法す。資糧中ごろ竭 き、人憂色あり。祖、励厲まして曰く、糧尽く とも法命は尽くることなし。汝曹力めよや。寺 の脇尊、毘沙門天、靈応夙に著し。その夜、萱津 の二富人、同時に夢見ることあり。天王臨告して 曰く、尊客あり。疾く来たつて以て供給すべし、 と。二人卒かに差具を調へ、祖の許に造る。適

嘗^ニ嘗^ル、場^ニ場^ル
此^レ此^ノ、以上^ノの逸
話『聖絵』では26
段

場^ニ場^ル

虞^ニ虞^ル

神譚^ニ神^ノの^ニとがめ
園^ニ園^ル
器^ニ器^ノ。器敬^ニ人^ノ
材^ニとして敬^ルうこと
化陶^ニ―化導^ニ―『聖
絵』と同義か

状^ニ。嘗^テ居^ル。萱津^ニ時^ニ。巨蜂^一一團集^{フル}。法場^ニ。祖^ニ
曰^ク。此^レ伊勢大神^{ナリ}也^{ナリ}。

〔第二十六段〕

尾濃^ノ間^ノ化導^ノ時^ニ。豪凶^{ガウキヨウ}相戒^{イイマシメテ}。曰^ク。凡^ソ値^ツ遇^シ
聖人^ニ。往^ス詣^ス道場^ニ者^ニ。毫^ス不^レ得^レ加^{フル}害^ヲ焉^ヲ。儻^{モン}
有^レ犯^ス之^ヲ者^ニ。必^{ラス}無^レ貸^ス。以^テ故^ヲ留錫^ヲ三年^ニ。断^{タエテ}
無^ニ盜賊^ノ争鬪^ノ之^ヲ虞^ニ。既^ニ至^リ近江^ニ宿^ニ草津^ニ。
一夜雷雨^ノ俄^{カニ}至^ル。祖^ニ謂^テ侍者^ニ曰^ク。今^ヤ也伊
勢大神^ニ日吉山王^ス臨^ス焉^ヲ。我黨^ニ不^レ信^ノ輩^ノ。
定有^テ下^リ。蒙^フ神譚^ニ。罹^ニ病患^ニ者^ニ。明旦^ニ果^{シテ}有^{ラシ}驗^シ。
病者^ハ十三人^ニ。時^ニ延暦^ノ園城衆^ノ徒^ノ竝^ニ輸^ニ。
器敬^ニ。化陶^ニ。無^レ不^レ遍^ハ及^ニ。

風、壇帷を巻き、佛を露はす。衆進んで之を拝す
るに天王、座を離れて鴻立し、政しく祖を逐ふる
状に似たり。嘗て萱津に居る時、巨蜂一団、法場
に集ふる。祖の曰く、此れ伊勢大神なり。

〔第二十六段〕

尾濃の間、化導の時、豪凶相戒めて曰く、凡
そ聖人に値遇し、道場に往詣する者、毫も害を加
ふるを得ず。儻し、之を犯す者あれば、必ず貸す
無けん、と。故を以て留錫三年。断えて盜賊争鬪
の虞、無し。既に近江に至り草津に宿するとき、
一夜雷雨、俄かに至る。祖、侍者に謂て曰く、今
や伊勢大神・日吉山王臨す。我党不信の輩、定め
て神譚を蒙ぶり（むり）、病患に罹る者有り。明
旦、果して驗らん。病む者十三人。時に延暦・園
城の衆徒並びに器敬を輸し、化陶、遍ねく及ばざ
ることなし。

『一遍上人行狀圖』の翻刻（吉田）

冠 註	本 文	書 き 下 し 文
（弘安七年） 此一此、轂轂 鱗萃Ⅱうろこのよ うに多く集まる 魄一餽Ⅱ饋、〔贈〕 の意、釋一釋 哀一衰、已↓己 踵一踵、慕一慕、 躅一躅、場一場	〔第二十七段〕 七年閏月入ニ四條釈迦堂ニ一頃焉移因幡堂ニ此際観聴鱗萃肩相摩轂相擊四延殆無ニ立錘之地土御門内府餽レ歌問ニ出離生死之要祖乃造レ文辨釋其義理一繫以レ歌 衰苦々耆須那酒坑奔己玖慕紆哆々塗乃瑜梅宇逗々豫里朋訶洒比渡姑准 其後歴ニ禮蓮光雲居悲田六波羅諸利一踵慕ニ空也芳躅一占居市屋道場一 〔第二十八段〕 祖恒日空也者吾先達日以レ誦ニ其文ニ為レ事故其始也棄ニ身命於山野任ニ居住於風雲ニ至ニ化縁日雖ニ道俗圍繞喜捨如山身外不レ留ニ一物肌不レ纏ニ絹帛手不レ觸ニ金具生涯絶ニ葷酒以全三十重	〔第二十七段〕 七年閏月、四條釈迦堂に入る。頃焉因幡堂に移る。この際、観聴鱗萃、肩相い摩轂相ひ撃ち、四延殆んど立錘の地なし。土御門内府歌を贈り、出離生死の要を問ふ。祖、乃ち文を造りて、その義理を弁釈し、繋ぐるに歌を以てす ほととぎす、なのるもきくも、うたたねの、 ゆめうつつより、ほかのひとこゑ その後、蓮光・雲居・悲田・六波羅の諸刹を歴礼し、踵いで空也の芳躅を慕ひ、居を市屋道場に占む。 〔第二十八段〕 祖、恒に曰く、空也は吾が先達なり。日にその文を誦するを以て事と為す。故にその始や身命を山野に棄て、居住を風雲に任す。化縁の日に至て、道俗圍繞し喜捨、山の如しと雖も、身外一物を留めず、肌に絹帛を纏はず。手に金具を蝕れ

印胤——「印承」『聖 繪』、以下二種の逸 話『聖繪』では前後 逆 假現——「化身」『聖 繪』 夢——夢、胤——胤、 場——場	場——場	疑——疑	或——或	烏（焉にあらず） 「おのがこころをひ かすれば」 『二遍上人語録』
之戒珠。異時法印胤惠携 ^ニ 來靈夢記 一篇 ^ヲ 。師 ^ハ 為 ^ニ 勢至菩薩之假現 ^ニ 。藤原 基長 ^{モトナガモ} 亦託 ^シ 夢寄 ^ニ 贊徳文 ^ヲ 。祖並 ^ニ 不 ^レ 省 ^セ 胤 市屋道場現住 也後改作阿。	〔第二十九段〕 其五月自 ^ニ 市屋道場 ^ニ 轉 ^ス 洛西桂邨 ^ニ 登 ^ト	時答 ^ニ 都人 ^ニ 歌 於望 ^{オモヒ} 望徒 ^{ヒト} 祁婆 ^{ケバ} 。秀疑 ^{スギニシ} 貳始 ^ニ 介 ^ニ 哆莫 ^{カモ} 。 兪矩 ^{ユコ} 秀衛母 ^{スモ} 。斐妬 ^{ヒトムスビ} 牟殊 ^{ムスビ} 寐奈留由 ^{ナルユ} 賣酒 ^{マノ} 與 ^ヨ 乃難 ^{ナカ} 詞 ^カ	居 ^ル 數日 ^ニ 。祖臥 ^シ 病有 ^レ 感 ^ニ 。乃 ^ハ 述 ^テ 宗門之要 ^ヲ 廣視 ^{クシメス} 同行 ^ニ ——其文詳 ^ニ 於緣起 ^ニ 。先 ^ニ 是人或問 ^ハ 法門 ^ヲ 之主眼 ^ヲ 。祖教歌 塗賦 ^{チアツ} 菟尼墓 ^ニ 。於酒 ^{オノ} 餓 ^セ 許 ^セ 々 ^ニ 廬 ^ハ 烏 ^ハ 斐 ^ヒ 區 ^{クズ} 儒 ^ハ 々 ^ハ 破 ^ハ 。未 ^ミ 汗 ^ツ 齊 ^セ 咩 ^セ 駄 ^ダ 磨 ^マ 乃 ^ハ 。逗 ^ツ 愈 ^ユ 等 ^{トシ} 辞 ^セ 羅 ^ラ 儒 ^ニ 耶 ^ヤ	
ず。生涯輩酒を絶ちて以て十重の戒珠を全うす。 異時、法印胤惠、靈夢記篇を携へ来て曰く、師は 勢至菩薩の化現たり。藤原基長も、また夢に託 し、贊徳の文を寄す。祖、並に省せず／胤惠は市屋 道場の現住なり。後ち作阿と改む。	〔第二十九段〕 その五月、市屋道場より洛西桂邨に転ず。登 時、都人に答ふる歌 おもひとけば、すぎにしかたも、ゆくすゑ も、ひとむすびなる、ゆめのよのなか 居ること数日、祖、病に臥し感あり。乃ち宗 門の要を述べて、広く同行に視す／その文、縁起に 詳し、是れより先、人或ひは法門の主眼を問ふ。 祖の教歌 ねぶつにも、おのがこころを、ひくずずは、 みをせめだまの、つゆとしらずや			

『二遍上人行狀圖』の翻刻（吉田）

冠註	本文	書き下し文
（弘安七年） 國一國 筱村―「篠村」―聖 繪―數―跪― 跪、路、路、左― 此一此 左―此 此一此 ○点線箇所は要注 意（人権問題） 矇―矇	〔第二十段〕 其秋徂^{ユキ}丹波國^ノ。入^リ夜失^シ舍^ヲ眠^ム。筱村^{シノムラノ}陰^ノ 櫺^{エツニ}。忽^{マチ}有^リ數人^リ來^テ跪^キ于路^ニ。左^ニ曰^ク。奉^ル要^ニ聖 人^ヲ於^ニ穴太^ニ。明日^{アサニ}往^テ尋^ニ覓^ス。不^レ得^ズ其^ノ人^ヲ。會^フ 祖^ヲ患^レ病^ニ。因^テ留^リ十餘日^ヲ。一郷特^{コトニ}加^ヘ恭^ニ敬^ヲ 相^サ携^ヘ受^テ念^フ佛^ヲ。此^ノ地也^{ナリ}窮^ニ僻^ニ。土俗^{クハ}多^ク以^テ 敗^メ獵^ヲ為^ス生^ヲ。狀^メ只^ニ極^ニ醜^ニ惡^ニ。殆^シ不^レ類^セ人^ノ間^ニ。 而^ル傾^ニ心^ニ至^ニ於^ニ如^レ此^ノ。此^ノ知^ル囊^ニ人^ノ是^ニ觀^ス音^ヲ 化^ニ身^ニ。致^ス祖^ヲ以^テ契^ニ緣^ニ。於^ニ癡^ニ矇^ニ。	〔第二十段〕 その秋、丹波の国に徂ぎ、夜に入り舍を失し、 筱村の陰櫺に眠る。忽まち數人あり。来りて路の 左に跪きて曰く、聖人を穴太に要し奉まつる、と。 明日、往きて尋覓するに、その人を得ず。祖、病 を患ふるに会ふ。因て留まること十余日、一郷特 に恭敬を加へ、相ひ携へて念佛を受く。此の地や 窮僻、土俗多くは敗獵を以て生を為す。狀貌、極 めて醜惡、殆んど人間に類せず。而るに傾心、此 の如くに至る。ここに知んぬ、囊の人は是れ觀音 の化身、祖を致す、以て癡矇に契縁せしむるを。
（弘安八年五月上旬） 面―面 場―場	〔第三十一段〕 次年遊^シ丹波^ニ。對^{シテ}海^ニ念^フ佛^ス。應^{シテ}時^ニ有^リ童^ニ 出^テ現^ル波^ノ間^ニ。行^ク數里^ヲ。祖展^{キテ}眸^ヲ。洋^ニ面^ニ曰^ク。龍 容^ヲ降^リ雨^ヲ。爾等^{タス}各^ニ受^テ供^ス養^ス之^ヲ濡^ニ。言^ハ未^ダ訖^ニ 雷^{ベシ}雨^ヲ滂^{タリ}沛^ニ。移^テ入^リ但^ニ馬^ニ一^ニ起^リ道^ノ場^ヲ於^ニ久^ニ美^ニ。 落^{ラク}慶^{キヤウノ}。日^ニ洋^ニ上^ニ頻^ニ飛^{ハス}電^ヲ。祖曰^ク竜^ニ王^ニ今^{マサニ}旦^ニ	〔第三十一段〕 次年、丹後に遊方し、海に對し念佛す。時に応 じて竜の波間に出現せるあり。行くこと數里、 祖、眸を洋面に展べて曰く、龍の容に雨を降だ すべし。爾等、各おの供養の濡を受けよと。言 未だ訖らざるに雷雨滂沛たり。移りて但馬に入

滔一滔

異一異

戸祝^{スル}神官・かな
なぎ
○丐人・乞児^ニ要
注意語
宗祝^{スル}戸祝^{スル}「祭祀
を司る官名」
使^シ(送り仮名「シ
テ」衍字)
惕然^ニおそれつつ
しむ
數一數

来^テ結縁^{セント}。日中雷雨大作^{ニオコリ}。潮水滔々^{タウク}。襄^ハ岸^ニ。堂上^ニ没^ス脛^{ハダ}者數尺^ニ。行道終^{ハリ}。潮亦隨^テ退^ス。於是人益^ニ伏^ス其神異^ニ。遂道^ニ化因伯^ス二州^一。

〔第三十二段〕

達^{スル}美作^ニ之首^{ハジメ}。謁^ス宮神^ノ戸祝^シ見^テ丐人^ニ乞児^ノ之追^イ跟^{スル}。祖^{ソレヲシテ}後^ニ造^リ假屋^ヲ于門外^ニ。寘^{オキ}之^ニ。不^レ令^ニ其^ニ近^レ社^ニ。祖作禮^{サライシテ}。他^ニ之^ニ。一夜宗祝眠中^ニ神有聲^リ曰。再招^シ一遍^ニ使^シ我^ニ聽^ク法^セ。于^レ時後山震動^ス。有^レ人曰神今臨^ニ法會^ニ。又見^{ルト}三社^ニ下棲^ニ無數巨蛇^ノ。衆聞惕然^ニ迎^フ師弟^ヲ于拜殿^ニ。會^ニ神饌所^ニ鑊^ノ。響聞^ニ數町^ニ。神憑^レ巫告^ニ曰。爲^ニ粥^ヲ於此鑊^ニ以供^フ聖^ニ。便^ハ如^レ之^ノ。吼音即歇^ム。

り、道場を久美に起こす。落慶の日、洋上頻りに電を飛ばす。祖曰く、竜王今、且に来りて結縁せんとす。日中雷雨、大いに作り、潮水滔々として岸に襄る。堂上、脛を没する者數尺。行道終はり潮また隨て退ぞく。是において人益ます、その神異に伏す。遂に因伯の二州を道化する。

〔第三十二段〕

美作に達するの首、一の宮の神に謁す。戸祝の丐人・乞児の祖の後に追跟するを見て、化屋を門外に造りて、之に寘き、それをして社に近づかしめず。祖、作礼して他に之く。一夜、宗祝、眠中に神、声あり曰く、再び一遍を招き、我をして聴法せしめよ。時に後山震動。人あり曰く、神、今法会に臨む。又た社下に無數の巨蛇を棲ましむるを見る、と。衆聞て惕然、師弟を拜殿に迎ふ。會神饌所の鑊吼え、響き數町に聞こゆ。神、巫に憑り告げて曰く、粥を此の鑊に為りて、以て聖を供せよ。便はち之の如くす。吼音即はち歇む。

『二遍上人行状図』の翻刻（吉田）

冠 註	本 文	書 き 下 し 文
（弘安九年） 惘祈^レ惘願・懇求・ 懇願・懇請 嗟服^レ感心して従 う。真^一真^一華^一 嘗^一嘗^一 奇^一奇^一靈^一靈^一 靈	〔第二十三段〕 九年復次^ニ于天王寺^ニ。比日寺寶佛舍 利膠^ニ壺底^ニ不^レ出。祖聆^キ之^ヲ惘祈七日。三 粒舍利出現^ニ如^レ故。満山僧衆及香客 深嗟^ニ服其道真^ニ。時有^下散華動^レ瑞祥雲 流^ニ彩^ニ之微^上。又嘗有^下親筆名号^ニ嬰^レ災文 字儼^ニ存^ニ爐中^一者。或有^下黒痕變^ニ金色^一者^上。 其他神奇靈妙之疊見不^レ可^二彈^一記^一。	〔第二十三段〕 九年、復た天王寺に次る。このころ 壺底に膠して出でず。祖、之を聆き、惘祈七日、 三粒の舍利出現する、故の如しと。満山の僧衆及 び香客、深くその道真に嗟服す。時に散華、瑞を 動かし、祥雲彩を流した微あり。また嘗て親筆の 名号、災に嬰り、文字、爐中に儼存するものあり。 或ひは黒痕、金色に変ずるものあり。その 他、神奇靈妙の疊見、彈く記すべからず。
	〔第二十四段〕 祖法^シ施住^ニ吉神祠^ニ。尋自^ニ和泉^ニ如^ニ河内^ニ。 謁^ス聖德太子廟^ニ。禮讚三七。第三日有^ニ 感應之表^一。祖獨召^ニ他阿^一視^レ之。他日供 僧問^ニ其事^一。祖乃粗説^ニ其狀^一。固禁^ニ宣傳^一。 既^ニ而抵^ニ和州當麻寺^一。留止^ニ内製^ニ四言^一、 誓文^一。寺司隨喜送^ニ以^ニ中將尼染毫稱^一 讚淨土經^一。祖終身崇持厭世日寄^ニ與^一。	〔第二十四段〕 祖、住吉の神祠に法施し、尋いで和泉より河内 に如き、聖德太子の廟に謁す。礼讚三七、第三日 にして感應の表あり。祖、独り他阿を召して、之 を視す。他日、供僧、その事を問ふ。祖、乃ち粗 その状を説くも、固く宣傳を禁ず。既にして和州 当麻寺に抵る。留止の内、四言の誓文を製る。寺 司、隨喜し、送るに中将尼の染毫、称讚淨土經を

書寫山住侶云。

〔第三十五段〕

冬月往^ニ拜雄德山八幡宮^ヲ。濟^テ河託^ニ足^ヲ上野邑^ニ。數日中相^ニ見^セ。大炊御門禪門^ニ其所把^レ扇柄^ヲ小^ニ。澆^ニ。主人有^ニ難^ナ色^ヲ。祖乞^テ得^ニ鉢^ヲ其澆^ニ以還^ニ。事雖^レ細^ニ。亦可^ニ以觀^ニ用意周密舉厝敏捷^{ナルヲ}一也。

曩時^ニ々々きの時、
むかし、以前の意
戒毖^ニ戒め慎む意
此^一此
一如^一「如一」『聖
繪』『絵詞伝』『直
談鈔』卷十二「如
一上人之事」

〔第三十六段〕

其歲晚^ス別時^ヲ於天王寺^ニ。曩時^ニ毎^ニ擧^{ケル}別行^一。祖依^ニ行者之行動^ニ以洞^ニ悉其業^ヲ報及信心之淺深^ヲ一切加^ニ戒毖^ヲ。至^テ此^ニ以爲無^レ益^ト。遂寢^ニ其事^ヲ。祖慧眼如^レ炬^ノ。心智如^レ鑑^ノ。深透^ニ幽明死生之理^ニ。如^ク僧一如^ノ之獲^ニ正果^ヲ。城禪門之死^ニ于事^一。或山内某之私^ニ兵刃^ヲ上^ニ。一隔^レ地異^レ。居知^ニ其死期^ヲ。

以てす。祖、終身崇持し、厭世の日、書寫山の住侶に寄与す、と云ふ。

〔第三十五段〕

冬月、雄德山の八幡宮を往きて拝し、河を濟ひて足を上野の邑に託す。數日中、大炊御門禪門に相見せるとき、その把る所の扇柄、小しく澆たり。主人難色あり。祖、乞い得て、その澆を鉢に以て還へす。事細けりと雖も、また以て用意周密、挙厝敏捷なるを觀るべし。

〔第三十六段〕

その歲晚、別時を天王寺に修す。曩時、別行を擧ぐる毎に、祖、行者の行動に依りて、以てその業報及び信心の淺深を洞悉し、切に戒毖を加へり。此に至て、以て益なしと。遂にその事を寢む。祖の慧眼、炬の如し。心智、鑑の如く深く幽明死生の理に透す。僧一如の正果を獲たる、城禪門の事に死せる、或ひは山内某の兵刃を私せる如き、

『一遍上人行狀圖』の翻刻（吉田）

冠 註	本 文	書 き 下 し 文
欺蔽^ニ欺誣、あざむきだます意。蓋^一蓋^一所^一 哥^一歌^一 峩^一峨。「ゆめにあとなし」『縁起』	一看^ハ破^{シテ}欺蔽^ヲ令^ニ其^ニ改^セ悔^ム。蓋^{シヨルナル}藉^ニ至誠感^ニ 格^ノ之所^ニ令^レ然^カ也^ム與^ニ。 〔第二十七段〕 適^ク播^ニ日^ム酬^{フル}。土御門氏^ニ哥^ニ 難^ナ峩^ガ伎^キ與^モ謨^モ。喻^ユ米^メ謨^モ安^ア止^シ奈^ナ之^ノ盧^ロ 矩^ク乃^ノ字^ジ乃^ノ。那^ナ怒^ノ累^ル盤^バ佳^カ利^リ茹^ゾ。姨^イ末^マ 洒^ノ臂^ヒ止^ト碁^コ回^エ 偶詠 浣^ワ我^ガ騰^ト於^オ墓^モ甫^フ。斐^ヒ刀^ト乃^ノ姑^コ々^々魯^ロ瓊^ニ。 臂^ヒ箇^カ遼^レ菟^ツ々^々於^オ酒^ソ禮^レ斗^ト飲^{イン}輔^フ蘆^ロ。區^ク 謝^サ枳^キ馱^ダ儻^ニ儻^ニ之^シ 答人 肆^イ都^ツ魔^マ題^デ謀^モ。易^イ傳^デ易^イ瑠^ル譬^ヒ渡^ト乃^ノ。韋^イ 枳^キ志^シ阿^ア良^ラ盤^バ。彌^ミ陀^タ能^ネ美^ミ酒^ソ理^リ酒^ソ。嘉^カ 世^セ半^ハ哆^タ愛^エ勢^セ示^シ 途^{ミチ}過^ク印^{イン}南^{ナン}野^ノ教^{キョウ}信^{シン}寺^ジ。因^ニ宿^{スル}一^ニ夕^ニ	一は地を隔て居を異にして、その死期を知り、一は欺蔽を看破して、それを改悔せしむ。蓋し至誠感格の然らしむるところに藉るなるか。 〔第二十七段〕 播^ユに適^ニ日^ム、土御門氏に酬^{フル}ふる歌 ながきよも、ゆめもあとなし、ろくのじの、 なのるばかりぞ、いまのひとこえ 偶詠 わがとおもふ、ひとのところに、ひかれつつ、をのれとおふる、くさきだになし 人に答ふ いつまでも、いでいるひとの、いきしあらば、みだのみのりの、かぜはたえせじ 途^{みち}、印^{いん}南^{なみ}野^のの教^{きょう}信^{しん}寺^じに過^かぐ。因^よて宿^{とど}する一^{ひと}夕^{しゆう}

（弘安十年）
躋—躋

鮮—解
景—「八葉妙法心蓮
故」『絵詞伝』
實—「六字寶号無正
故」同右

屢—屢

蓋—蓋

以下の二種の逸話、
『聖絵』では前後逆
四接法—「四摂法」
か
罹—罹

〔第三十八段〕

十年春躋ニ書寫山ニ乞レ拜ニ本佛ヲ。寺規供
僧外。不レ許レ啓龜。祖不レ勝レ希願ニ奉ニ詩偈ヲ
禱ニ其感納。

書寫即是解脫山 八景妙法心蓮故

性空即是涅槃聖 六字寶号無生故

介己禹都主。耶麻波多迦泥乃。素
良尼枳衣弟。敷題慕於遙播奴。都

企茹秀彌階屢

山僧大美ニ其志ニ聽レ所レ乞。既下レ山。恰度ニ
國中。念佛和讃之成。蓋在此間。

〔第三十九段〕

祖寓ニ備中輕部ニ時。讃ニ述十二具之持
文。以ニ四接法ヲ應レ機施化。同時花本寺
教願。來參ニ會下。果ニ其行願。及レ辭。偶
罹。既及ニ大漸ニ獻レ哥以乞ニ末期之教導。

〔第三十八段〕

十年春、書寫山に躋り、本佛を拜せんと乞ふ。
寺規供僧の外、啓龜を許さず。祖、希願に勝へ
ず、詩偈を奉げて、その感納を禱る。

書寫は即ち是れ解脫の山 八景（葉）妙法

心蓮の故に

性空は即ち是れ涅槃の聖 六字実（宝）号
無正の故に

かきうつす、やまはたかねの、そらにきえ
て、ふでもおよばぬ、つきぞすみける

山僧、大いにその志を美め、乞ふところを聴
す。既に山を下り、恰なく國中を度す。念佛和讃
の成る、蓋し此間に在り。

〔第三十九段〕

祖、備中輕部に寓する時、十二具の持文を讃述
し、四接法を以て機に応じ施化す。同時、花本寺
の教願、来りて会下に参じ、その行願を果す。辞
するに及び、偶、病に罹り、既に大漸に及ぶと

『一遍上人行狀圖』の翻刻（吉田）

冠註	本文	書き下し文
莒（上部は）莒か 屢屢 幾幾 闔境Ⅱ国じゅう 矣一矣、囑一囑	祖和曰 妬爾柯玖尼。摩余符莒々莒遇。志 屢閑爾麼。南無阿彌陀佛止。麻紆 主番介離序 〔第四十段〕 今年備後一宮神人。迎レ祖特張秦王 破陣舞饗レ之。蓋非常之典禮也。其秋 再航二巖嶋一内侍祝巫。虔仰不翅行臨 時祭。奏舞以贊ニ法施一。 〔第四十一段〕 正應紀元。祖旋ニ故國ニ。巡詣三島祠菅 生寺。又納ニ先父手澤之三經於繁多 寺。一幾。三島神告ニ供僧及地頭代某 曰。一遍近日修ニ行法於此。闔境其戮 レ力助レ之。不レ必。有レ悔矣。依レ是祖所ニ招囑一	き、歌を献じて、以て末期の教導を乞ふ。祖、和 して曰く とにかくに、まよふころの、しるべには、 なもあみだぶと、まうすばかりぞ 〔第四十段〕 今年、備後一の宮の神人、祖を迎えて特に秦王 破陣舞を張り、之を饗す。蓋し非常の典禮なり。 その秋、再び巖嶋に航するとき内侍祝巫、虔仰の 翅らず、臨時の祭を行なひ、舞を奏して以て法 施を賛く。 〔第四十一段〕 正應紀元、祖、故国に旋り、三島の祠菅生寺に 巡詣し、また先父手沢の三經を繁多寺に納む。 幾なく三島の神、供僧及び地頭代某に告げて曰 く、一遍、近日行法を此に修す。闔境それ力を戮 せて之を助けよ。しからずんば必らず悔あらん。

備備

行^ス・櫻會^ヲ・行中望^テ山^ヲ曰^{ハク}。神^ノ之召^ス我^ヲ今^ニ而^{シテ}
會^ニ其意^ヲ。因^テ喻^シ衆禁^ニ年首^ハ及^ヒ十一月^ハ供^ス
魚鳥^ヲ。神官以下國中酋長各^ニ欽奉^ス。連^ニ
署^シ其次第^ヲ以備^ニ後鑑^ニ。

(正応二年)

讀讀

節節

不予不快の意

哥歌

微微、舍舍

虚虚

〔第四十二段〕

二年巡^リ讀岐^ヲ。經^ニ禮善通曼茶羅^ノ名刹^ヲ。
進^ム筈^ヲ阿波^ニ。或日嘆^{シテ}日機縁^ハ已^ニ澆^ニ死期^ヲ
且^レ近^ク。行^{ハク}至^ニ大鳥^ノ里^ニ。心神不豫寢食違^フ
レ常^ニ。其感慨^ノ哥^ヲ
於^オ母甫^ヲ許登^ヲ。美那都棄^キ半弟努^ヲ。宇^ツ
絶止微^シ之^ヲ。遙平婆舍奈我^ヲ良^ヲ。安企^{アキ}
洒^ハ絆都加^ヲ制^ヲ
力^ツ疾航^ヲ淡路^ニ獻^ス二哥^ヲ二宮^ニ
奈耳加奈夫^ヲ。其々魯破尼士丹^ヲ。禹^ウ
途細美乃^ヲ。毛努祁波弓陀流^ヲ。虚衛^{コエ}
如周々^ヲ尸枳^キ

〔第四十二段〕

是に依りて、祖、招囑せられ桜会を行ず。行中、
山を望みて曰く、神の我を召す今にして、その意
を会せりと。因りて衆に喻し、年首及び十一月、
魚鳥を供するを禁ず。神官以下國中の酋長各おの
欽奉し、その次第を連署して、以て後鑑に備ふ。
二年、讀岐を巡り、善通・曼茶羅の名刹を經礼
し、筈を阿波に進む。ある日、嘆じて曰く、機縁
已に澆く、死期且に近しとす。行ゆく大鳥の里に
至つて、心神不豫、寢食常に違ふ。その感慨の歌
に
おもふこと、みなつきはてぬ、うしとみし、
よをばさながら、あぎのはつかぜ
疾を力めて淡路に航し、歌を二宮に獻ず。
なにかなう、こころはにしに、うつせみの、
もぬけはてたる、こゑぞすずしき

『一遍上人行状図』の翻刻（吉田）

冠 註	本 文	書 き 下 し 文
詣^ル詣^ル、幾^ニ幾^ニ 志津幾^一「志筑」 『聖絵』 赫著^ニ際立ちあき らか 瞿然^ニおどろくさま 疲憊^ニ疲れ果てる 埦間^ニつかのあいだ 慕^ニ慕^ニ 已^ニ己^ニ	〔第四十三段〕 詣^ル志津幾^ニ邑^ノ菅^ノ神^ノ祠^ニ。祝人^一不^レ納^レ之^ヲ。祖 言^ニ下^ニ詠^{シテ}曰^ク 豫^ニ爾^ニ夷^ニ豆^ニ蘆^ニ。計^{コト}妬^モ母^マ麻^マ連^レ奈^{ナル}留^ル都^ツ 藝^ニ勾^ニ該^ニ仁^ニ。介^カ々^リ里^リ野^ヤ輪^ラ良^ラ夢^ミ。美^ミ塗^ネ 乃^ノ宇^ウ喜^キ娛^ク望^モ 可^シ怪^{シム}其^ニ詞^ニ字^ニ歷^ニ々^ニ。現^{トシテ}出^ス社^ス壇^ニ。祝人^一目^マ 瞻^テ神^ノ感^ノ赫^ツ著^ニ。瞿然^ニ改^{タメ}レ客^ヲ待^ヲ接^ヲ尤^モ重^シ。 〔第四十四段〕 祖^一病^ニ惱^ニ日^ニ添^ヒ四^ニ大^ニ疲^{スレ}憊^ホ。猶^ホ跋^シ涉^シ東^ニ西^ニ。 日^ニ無^ニ虚^ニ日^ニ。偶^{タマシイ}憩^{イフ}埦^{ハシ}間^{カン}。一^ニ作^シ歌^シ曰^ク 陀^タ毘^ビ誤^ゴ呂^ロ慕^モ。己^ニ能^ニ泥^ニ介^ニ耶^ニ乃^ニ泥^ニ。貽^イ 豆^ズ矩^ク貳^ニ勾^ニ。微^ミ酒^ス秀^シ帝^{テイ}羅^ラ例^レ奴^ニ。徒^ト固^コ 呂^ロ安^{アル}累^{ベキ}陸^キ已^ニ 將^ニ赴^ム明^ニ石^ニ。收^メ迹^ヲ印^ニ南^ニ野^ニ。會^{アリ}兵^ノ庫^ノ人^ノ驪^シ 航^ヲ至^ニ。祖^一曰^ク何^ニ地^ニ利^ニ益^ニ不^レ可^レ施^ス。終^ニ乃^ニ駕^{シテ} 其^ニ舟^ニ。入^テ寓^ス兵^ノ庫^ノ觀^ニ音^ニ堂^ニ。今^ニ之^ニ真^ニ光^ニ寺^ニ	〔第四十三段〕 志津幾^ニ邑^ノの菅^ノ神^ノの祠^ニに詣^ルる。祝人^一、之^ヲを納^レれ ず。祖^一、言^ニ下^ニに詠^{シテ}曰^ク よにいずる、こともまれなる、つきかげに、 かかりやすらむ、みねのうきぐも 怪^シむべし、その詞^ニ字^ニ歷^ニ々^ニとして社^ス壇^ニに現^ス出^ス す。祝人^一、目^マ、神^ノ感^ノの赫^ツ著^ニを瞻^ミて、瞿然^ニ、客^ヲを 改^メめ、待^ヲ接^ヲ尤^モ重^シし。 〔第四十四段〕 祖^一、病^ニ惱^ニ日^ニに添^ヒひ、四^ニ大^ニ疲^{スレ}憊^ホすれども、猶^ホ東^ニ西^ニに跋^シ渉^シし、日^ニに虚^ニ日^ニなし。偶^{タマシイ}、埦^{ハシ}間^{カン}に憩^{イフ}ひ、 作^シる歌^ニに曰^ク たびごろも、きのねかやのね、いづくにか、 みのすてられぬ、ところあるべき 將^ニに明^ニ石^ニに赴^ムき、迹^ヲを印^ニ南^ニ野^ニに収^メめんとす。兵^ノ 庫^ノの人^ノ、航^ヲを驪^シし至^ルるに会^{ヘリ}。祖^一曰^ク、何^ニれ の地^ニか利^ニ益^ニ施^スすべからざらん。終^ニに乃^ニはち、その舟^ニ

即此也。

〔第四十五段〕

八月二日祖坐繩床。譚法。道俗畢集。祖口授遺誠於聖戒。記之。曰我化盡後。我執人中應有捨身者。今遺此記者。一爲防此等迷倒也。淚頻下。十日晨誦小經一過。并書卷一手。付火曰。一代聖教今日盡。獨留南無阿彌陀佛。又曰勿隔一遍聖戒之坐間。一阿相阿互侍牀下。結緣在家人爲尤要。自今日隨便親近。

隔隔

〔第四十六段〕

于時紫雲點空連日。祖曰還元期末至。至則決靡有如許事。十七日昏。祖

に駕して、入りて兵庫觀音堂に寓す。今の真光寺即ち此れなり。

〔第四十五段〕

八月二日、祖、繩床に坐して法を譚す。道俗畢く集まり。祖、口づから遺誠を聖戒に授け、之を記せしむ。曰く、我れ化尽の後、我執の人中、応に捨身の者あるべし。今、この記を遺すは、一ら、これ等の迷倒を防がんが爲なり。淚頻りに下る。日晨に小經を誦する一過、書卷を并せて手づから火に付して曰く、一代の聖教、今日尽く。独り南無阿彌陀佛を留む。また曰く、一遍・聖戒の坐間を隔つるなかれ。一阿・相阿、互ひに牀下に侍せよ。結縁の在家の人、尤要たり。今日より隨便親近せしめよ、と。

〔第四十六段〕

時に紫雲空に点ずる連日、祖曰く、還元の期末に至らず。至れば則ち決して許の如き事あるな

(正応二年八月九日)
還還
決決

『一遍上人行狀圖』の翻刻（吉田）

冠 註	本 文	書 き 下 し 文
奔逐^ニ奔馳^ニ、「急いで追^ニう」意	西向合掌高唱^{シククナフ}佛名^ニ。人々奔逐^ニ以爲^ニ期已近^ニ。哀別聲騰^{タリ}々。祖謂^ニ聖戒^ニ。今^ニ而久住^{スル}此世^ニ。於^ニ自他^ニ俱無^ニ益^ニ。第任^ニ報命^ニ邪^ニ。抑^{ソモク}將^ハ棘^ノ二命終^ヲ。戒泣對^テ曰^ニ。一日在世弟子^ハ一日之幸^{ナリ}也。願^ク見^レ任^ニ報命^ニ寺主亦曰^モ。衆人只祈^ノ壽延^ヲ。利益亦莫^{カニ}レ焉^{コレヨリ}。祖僅^ニ頷^ニ。	し。十七日昏^{ゆふぐ}、祖、西に向かひ合掌し高く佛名を唱ふ。人々奔逐し、以て期已に近づくとなし、哀別の声騰々たり。祖、聖戒に謂て曰く、今にしてこの世に久住する。自他において俱に益なし。第報命に任かさんか。抑將命終を棘にせんか。戒、泣きて對てて曰く、一日の在世は弟子一日の幸なり。願くは報命に任せられんことを。寺主も亦た曰く、衆人は只だ寿の延びんことを祈る。利益亦た焉より尚ふるなけん。祖、僅かに頷ず。
土人―「在地のものども」『聖絵』	〔第四十七段〕 翌日祖喚^テ聖戒^ヲ曰^ク。我眼應^レ有^ル赤條^ニ。赤條滅^{スル}日以取^テ滅度^ヲ。二十一日獨召^ニ門下^ヲ。頭北面西念佛^{シテ}。内外亦噪^{ハク}。祖曰未^{タシ}也。使人制^ヲ之^ヲ。或問曰^ハ。今日乃西宮祭^ニ。土人例^{シム}預^{シテ}其祀^ヲ者。悲^{シミ}不^レ遭^フ末期^ニ。不肯^テ往^カ。祖曰第往^ニ。今日我不^レ暇^ニ。日中眠醒^{メテ}。	〔第四十七段〕 翌日、祖、聖戒を喚んで曰く、我が眼に応に赤條あるべし。赤條滅する日、以て滅度を取るべし。二十一日、独り門下を召し、頭北面西して念佛す。内外また噪ぐ。祖曰く、未だし。また人をして之を制せしむ。或ひは問ふて曰く、今日乃はち西宮の祭。土人例して、その祀に預かる者、末期に遭はずを悲しみ、肯て往かず。祖曰く、第往け。

日。西宮神來。同時其神官造。請受臨終之十念。祖即降席恭授之。觀者初識神之憑人作結縁。

〔第四十八段〕

卓一点。溘焉。然、「たちまちにわか」の意悲慟。大声で泣く授—投

二十五億一千七百廿四人『聖絵』47段
億—昔は十万、後には万万をいう
蒙—蒙、蓋—蓋

二十三日辰初点。祖示入定之儀。溘焉。機息。實正應二年八月。享年五十有一。道俗悲慟。僉失聲。樂同生。投海者果七人。遺訓曰。棄屍於荒野。以飽鳥鳶。倘或在家輩效志者。不拒之。於是四方爭會。闍維立廟塔於觀音堂畔。凡遊行十六年間。受記者。二十五億千七百余人。一應結縁蒙化者。蓋不遑毛述。

今日我れ瞑せじ、日中眠醒めて曰く、西宮の神來ると。同時、その神官造り、臨終の十念を受くることを請ふ。祖、即ち席を降りて恭しく之を授く。観る者初めて識る。神の人に憑り、結縁を作すを。

〔第四十八段〕

二十三日辰の初点、祖、入定の儀を示し、溘焉として機息む。実に正応二年八月、享年五十有一。道俗悲慟して僉な声を失ふ。同生を樂ひ、海に投ずる者、果して七人。遺訓に曰く、屍を荒野に棄てて、以て鳥鳶に飽きしめよ。倘し在家の輩、志を效す者あらは、之を拒まざれ。是において四方争ひ会し、闍維して廟塔を觀音堂の畔に立つ。凡そ遊行十六年の間、記を受くる者、二十五億千七百余人。一応縁を結び化を蒙むる者、蓋し毛述に遑あらざるなり。

○文中に「人権」に抵触する箇所を含むが、歴史資料としてそのまま掲載したことをお断りしておきたい。

第一段		
第四段	第三段	第二段
第七段	第六段	第五段

(下)

第九段			第八段		
第十四段	第十三段	第十二段	第十一段	第十段	
第十八段		第十七段		第十六段	
第十五段		第十四段		第十三段	
第十二段		第十一段		第十段	
第九段		第八段		第七段	
第六段		第五段		第四段	
第三段		第二段		第一段	

『一遍上人行状図』巻下

(上)

『一遍上人行状図』の翻刻（吉田）

第二六段	第二五段	第二四段	第二三段
第二九段	第二八段	第二七段	
第三三段	第三二段	第三一段	第三十段

(下)

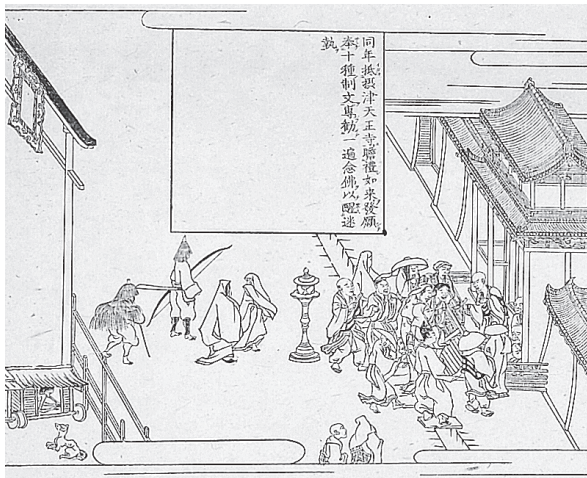
第三七段		第三六段		第三五段		第三四段	
第四二段	第四一段	第四十段		第三九段		第三八段	
第四六段		第四五段		第四四段		第四三段	
第四八段						第四七段	

第七段 四天王寺参籠、初めての賦算



『一遍上人行状図』の翻刻（吉田）

聖絵



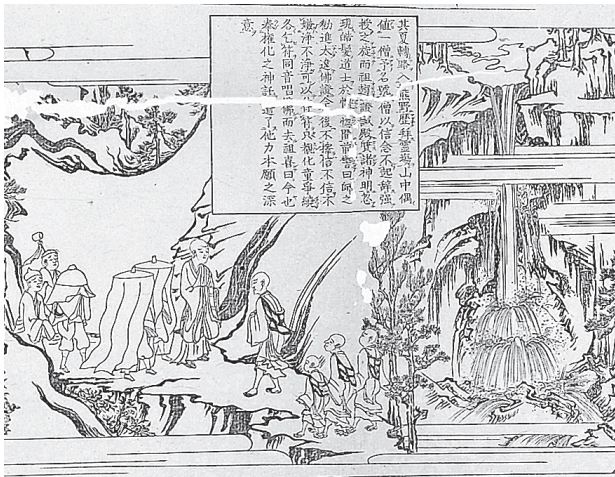
行状図

第九段 熊野山中、一人の僧への賦算

『一遍上人行状図』の翻刻（吉田）

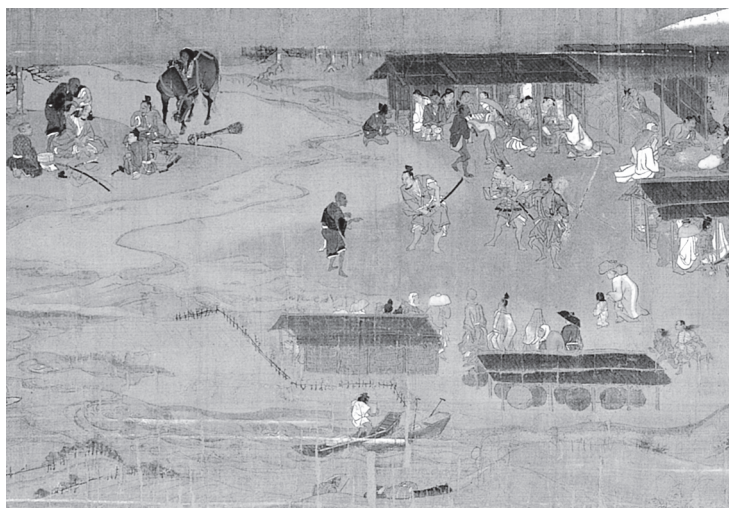


聖絵



行状図

第十四段 妻の出家に怒り、福岡の市まで追ってきた夫出家す



『一遍上人行状図』の翻刻（吉田）

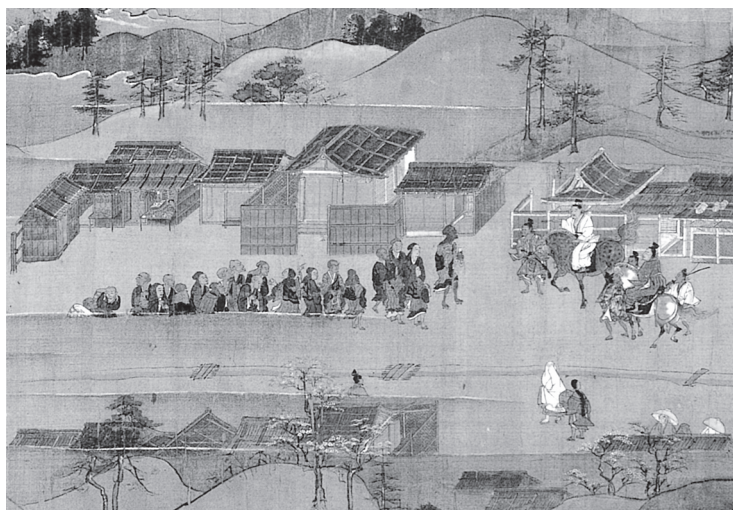
聖絵



行状図

第二十一段 こぶくろ坂にて鎌倉入りを拒まれる

『一遍上人行状図』の翻刻（吉田）



聖絵



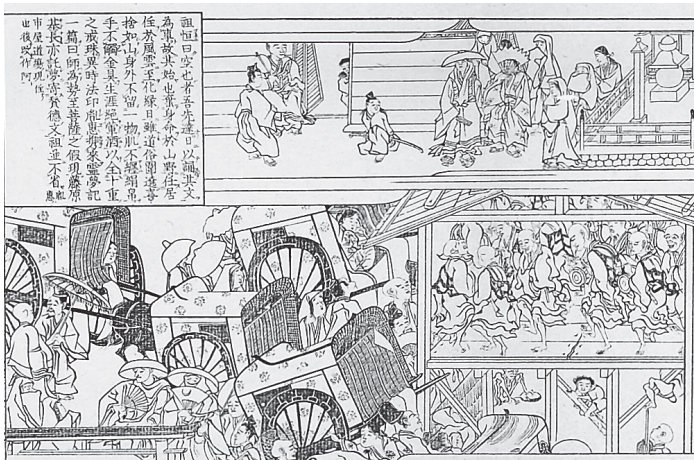
行状図

第二十七段 四条京極釈迦堂での踊念仏と賦算



『二遍上人行状図』の翻刻（吉田）

聖絵



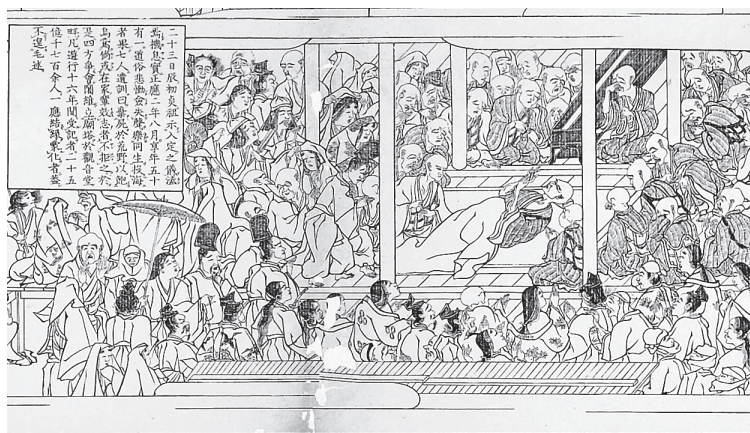
行状図

第四十八段 一遍上人往生

『一遍上人行状図』の翻刻（吉田）



聖絵



行状図